

「法話は行持道環の菩薩行なり 〳行説一如の行履の中から〳」

令和四年五月二十三日 於 宗務所  
講師 東龍寺住職 渡邊宣昭老師

一、法事の初めに 僅かな時間の坐禅と共に

まず最初に演題のサブタイトルとも絡むのですが、私が法事の始めにいつも実践していることを一緒に緒にしていたらこうと思います。まず手を法界定印にして姿勢を正していただき、上半身をまっすぐにして視線を四十五度下に下ろします。呼吸は腹の底からゆっくりと吐き出して、また腹の底に入れていきます。二、三回繰り返し、その後は口を閉じ、鼻から吐いて吸ってと繰り返していきます。

平成二十年に一〇八歳で御遷化されました永平寺の前々禅師さま、宮崎奕保禅師さまがいつも話されていたお言葉があります。

「朝起きたら、仏壇に向かって、線香をまっすぐに立てて、合掌をして『ご先祖様、私を生んでくださって有難うございませう。一切の生きとし生けるものが幸せでありますように。』とお唱えし、体をまっすぐにして坐りなさい。

体がまっすぐになると心がまっすぐになり、心がまっすぐになると思うことがまっすぐになり、思うことがまっすぐになると言うことがまっすぐになり、言うことがまっすぐになると行うことがまっすぐになる。」

まっすぐというのは正しいという風にも取れますが、仏の教えからしますと真心のこもった、相手も思いやる気持ちを起こしていく、そういうことに繋がっていくと思います。優しい言葉、優しい行いを朝のスタートで仏壇の前で誓っていく、そんな日送りをぜひ実行していただきたいと思えます。どうぞ合掌して楽しんでください。

以前はただ坐禅をしてもらっていただけなのですが、宮崎禅師様がよくお話くださったこのお言葉をお借りして私自身が自分の言葉として話しております。「自信教人信」という「自ら信じるところを人に信ぜしむ」という伝教大師のお言葉がありますが、やはり実践していく、「法話は行持道環の菩薩行なり 〳行説一如の行履の中から〳」と題をつけさせていただいておりますが、皆さんに少しでも仏の教えを実行していったら、あつ、そうかという「気づき」、坐禅というのはこういうことか、まっすぐにする、そしてそれからいろいろな日々の行動が起こっていくんだ、仏壇に誓いを立てて一日を過ごして行くんだという気持ちをスタートに持つてもらいたいということ、法事の折には坐るだけではなく、十回くらい吐いて吸ってと繰り返した後、皆さんにもぜひ実行してくださいという願い、想いを申し上げています。同じようにしてくださいとは申しませんが、またそれ以上のことをされている方もおられるかもしれないませんが、やはり日送りの中で仏の教えを実践していくことに繋がってくるのではないかと。十人いたら一人か二人、気づいてくださればありがたいことだなと思ひまして、そんなことで最初に示させていたいただきました。

二、二番目に宗憲の第九条ですが、

第九条 本宗の教化は全宗門人が行わなければならない。

ということでありませう。布教師会に参加されている方、されていない方。入っている方、入っていない方

区別なく、全宗門人が本宗の教化を行わなければならない。私たちは法の師でありますから、そういうことを常に心がけて実践していくことが大事であります。ですから「ここにお書きしました。

### 三、曹洞宗布教指導叢書「布教伝道の心得」から

また、曹洞宗布教指導叢書ですが、これは戦後間もない頃に出たものであります。何回か示させていたのですが、改めて私が気づかせていただいた文言があります。

「布教は伝道である、伝道は伝法である、佛祖の法燈をかかげて、人生の進路を照らすのが布教伝道の大本である。」  
(第一段)

布教伝道は最後まで自己の修行である。利他の方便である無所得の営みが、同時に自己を向上し増益して、普く自他を利する一法の利行である、そして、廣大の慈恩に報ゆる行持であり、佛の御命に生きる道である。」

(最終 第八段)

昨年まで「ここに行持という言葉があるのを見落としているのか、ずっと読んでいたのですが、私は昨年度布教師養成所の主任講師を任命され「正法眼蔵 行持の巻」を講本に選ばせていただいたことで、行持は布教そのものなんだと改めてこの第八段を読む中で再認識をし、利行であるし、まさに自他共に歩む同事行でもあると気づきました。これはいつも思っていることですが、自分だけ先走ってはいけないし、上から目線でもいけない。やはり檀信徒とともに歩む同事行ということを踏まえていかなければという想いをいつも持っているところでもあります。

### 四、行事と行持の違い

四番目に「行事と行持」と書きました。一般的には「ぎょうじ」と言いますが、行おう事と書く方ですが、道元禪師様が正法眼蔵等でお示し下さっているのは「行持」であり、行持規範などと使われています。この違いですが、禅学大辞典によりますと、行事は「事をなす行」。恒例の法要の儀式作法、及び三時(朝・昼・晩)の勤行をいう。」と示されており、行持の方は「行は修行。持は護持・持続。佛祖の大道を修行し、永久に持続して倦怠せぬこと。菩提の道を失わぬように修行して、究竟道にいたっても退転することなく護持する意」。最高の境地に至っても決して休むことなく護持していくのだという非常に強い思いがこもった言葉だと思います。

ただ私自身は駒澤大学教授の角田老師にお聞きしたことがあるのですが、三時の勤行や僧堂で行うものは行持として考えてよいのではないかといいました。行事というのはイベントですとか打ち上げ花火的なものを行事と考えて、宗門の行いというものを行持ととらえた方がふさわしいのではないかとアドバイスを受けました。私自身は朝のお勤めとか毎日きちんと行っていくものは行持と思っているところでもあります。

### 五、

次に本日の演題を「法話は行持道環の菩薩行なり」とつけた要因となったのは『面山述贊』という面山瑞方禪師のお言葉です。

「行は即ち修行、持は即ち護持。発菩提心を修行し護持する所以なり。」(『面山述贊』)

まさに布教という行持を修行して護持していく。では、どのようにしていくのかというのは発菩提心を

修行して護持していくということです。

## 六、発菩提心とは

発菩提心とは何かということが『正法眼蔵 発菩提心』に

「おおよそ菩提心は、いかがして一切衆生をして菩提心をおこさしめ、仏道に引導せましと、ひまなく三業にいとむむなり。いたづらに世間の欲樂をあたふるを、利益衆生とするにはあらず。」

とあります。皆さんを仏道に導いていくことが発菩提心であり、皆さんの欲望を満足させることではないと示してくださっています。

「発心とは、はじめて自未得度先度他の心をおこすなり。これを初発菩提心といふ。」

自未得度先度他の心を起こしていくことが発心であり、初発菩提心である。こういったことから、発菩提心を起こしていく法話をすることが大切なのだということです。

## 七、行持に学ぶ

『正法眼蔵』「行持(上)」の教えから

### ①行持道環

次に、本日は『正法眼蔵』「行持(上)」が中心であります。その中に示されているお言葉をいくつか示させていただきます。その中でも最初に出てくるお言葉です。最初に出てくるということはそれだけ道元禪師様も中心だとお考えのお言葉だと思えます。

「仏祖の大道、かならず無上の行持あり、道環して断絶せず、発心・修行・菩提・涅槃、しばらくの間隙あらず、行持道環なり。」

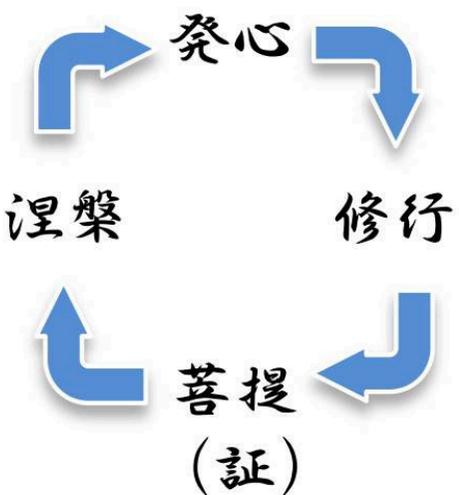
『行持(上)』

発心して修行をし、そして菩提・涅槃と来て、また発心へ戻っていく(道環)。常にぐるぐる回っていくということでもあります。発心・修行・菩提・涅槃を常に繰り返していく。そして

「一発菩提心を百千萬発するなり」(『正法眼蔵』「発無上心」)

とお示しです。例えば人生を百年と考えて、百年を秒に直して百千萬(十億)で割りますと3.1秒くらいになります。道元禪師様はそういうことはお考えにはならなかったでしょうけど、常に発心・修行・菩提・涅槃を繰り返していくのだということを「一発菩提心を百千萬発するなり。」とお示しくださっているのだと思います。そして

「発心は一発にして、さらに発心せず、修行は無量なり、証果は一証なりとのみきくは、仏法をきくにあらず」(『発無上心』)



一回きりの発心で再び発心しない、悟つたらもういいんだということでは本当の仏法を聞いていることにならないのだというお示しであります。

私が以前この教えをお聞きした時に、それ以前にお聞きしたすごく好きな言葉がありました、こんな風な生き方がいいなと思つた言葉が次のお示しです。

「仏道は初発心のときも仏道なり、  
成正覚のときも仏道なり、初中後  
ともに仏道なり。たとへば、万里を  
ゆくものの、一步も千里のうちなり、  
千歩も千里のうちなり。初一步と  
千歩とことなれども、千里のおなじき  
が」とし。」  
『説心説性』

発心して菩提、涅槃という人生に例えれば

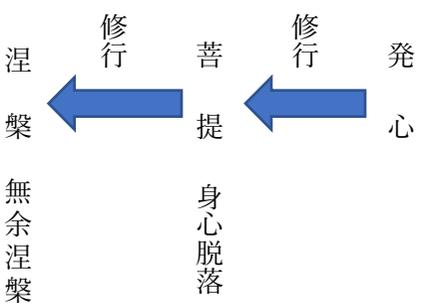
こういう歩みがあつて、これは修証一等の歩みだと思つたのですが、

例えば道元禪師が身心脱落をされたのが途中にあつたように気付きがあつたとしても、その気付きの前後も同じように修行していく。私が永平寺の役寮をしていたときに「私は三步目が四歩目くらい、修行僧は一步目入つたくらいでしょうか。禪師様は千歩のうちの九百九十九歩目くらいを歩んでいらつしやるでしょうか。」というような言い方をしていました。しかし、最近この行持道環の教えを拝読しながら思いましたことは、「そうじゃないな。どの一步も皆同じように大事な行持道環の一步、一步なんだな。」ということでもあります。

#### □長岡市朝日寺東堂・永井孝道老師との思い出

次に永井孝道老師のお話なのですが、私の義理の叔父になるので身内の話と思われるかもしれませんが、そう思わないで聞いていただきたいと思つています。亡くなる年にたまたま三、四回お会いすることができたことで晩年の様子からこの行持道環と説心説性の巻の教えがひとつだなという思いが強くなりました。永井老師は二十代で教区長、三十代で宗務所長、四十代で宗会議員、五十代で宗務総長になつた方です。非常に体格の良い方で、駒澤大学の相撲部に在籍された体躯のいいがっちりした方でいらつしやいました。私自身もお会いして教えをいただいたり、小さい頃は親戚で集まると豪快にお酒を飲まれ、この人は一体どういう人なのかと子供心に思つた覚えがあります。豪快でありながら緻密な面も持ち合わせていたから、そこまで歩まれたのだろうと思つています。その永井老師の前の宗務総長のときに人権の大きな問題が起きまして、急きよ永井老師が宗務総長を務めることになりました。そのとき、私は大本山永平寺に安居中でした。私が監院寮に行者としていたときに永平寺にご挨拶に来られたときのご様子は印象深かったです。立派な方なんだと改めて思つたことを覚えています。永井老師は総長のときに「坐禅会」という単牌を作られ全寺院にお配りされました。それだけ坐禅を大事にされた方でありました。そんなこともありまして、晩年は人権や同和問題の方に力を入れられまして、県の人権センターの初代の理事長をお務めになりました。そういった活動をされてこられた方でいらつしやいます。

私が永平寺の役寮を下りたころでしょうか、お孫さんが坐禅会を始めたということで、七月の朝日寺恒季法話のときに檀家の皆さんに坐禅の話をして宣伝してもらいたいという依頼をいただきまして、話をさせていただきます。その当時は老師の亡くなる三、四年前でしたのでだいぶ腰などを悪くしていらしたのですが、お孫さんが坐禅会を始めると老師も出てこられ、どつしりと静かにお座りになられ



ていたようです。お檀家さんはやはり老師が出てこられると雰囲気が変わると言われていたそうです。その坐禅会のあとの茶話会にて永井老師が

「私は、まだまだ修行中なのです。これから皆さんと一緒に坐つていきます。」

とあいさつされたそうです。九十を過ぎて身体が弱られても「こういう気持ちをお持ちになつていた方でした。一昨年、令和二年の九月二十三日に亡くなられたのですが、その年の七月頃に体が弱つたということで母とお顔を見に行つてきました。そうしたら元気に「に」こと笑顔で出てこられました。私がポロつと「近々永平寺で顧問会がありますよね」と言ったらギョッと私の目を睨むんですよ。周りの家族は本人の体を心配して黙っていたことだったのを私が言つてしまい、「ご本人にしたら「顧問会があるのか!」という感じでおられて、まだまだ休んでられないというような気持ちを持つておられるのだと改めて感じました。それが七月でした。そして八月に体調を崩され、九月半ばにもうダメではないかという話があり、「ご自坊、ご自宅で療養されていらつしやつたのでそちらへお顔を見に参りました。そうしたらもう意識は無かつたのですが、フウー、フウーと呼吸していらつしやいました。「東龍寺さんがきてくださったよ」とご家族が声をかけると、フウー、フウーという呼吸をしながら確かにニツツと微笑んでくださったのです。私のことをわかつてくださったのだという思いを抱きました。そして、その呼吸の様子が一呼吸一呼吸、まさに命を刻んでいるというように私には見えました。一呼吸一呼吸、人生を刻んでいる。発心・修行・菩提・涅槃の一呼吸なのだと思います。ちょうど「行持」の巻を参学したものですから特にそのように感じました。

□『日本一短い母への手紙』の中に吉村かおるさんの

「お母さん、自分の体を、一息一息拝むことが仏を拝むことですよ」

という詩があります。お釈迦様は人生の長さを問われ、「一呼吸」と答えられました。ですから人生は一呼吸の積み重ねなのかと改めて思いますと、まさに行持道環と「説心説性」の巻の万里の歩みと、というのが繋がってくるというように私は理解しているところです。

## ② 不曾染汚の行持

『行持(上)』の行持道環のあとに

「このゆえに、みづから強為にあらず、陀の強為にあらず、不曾染汚の行持なり」

と続きます。これは「今だ曾て、穢れのない行持である。」(染も汚もけがれという意味)ということであります。このことについて角田老師に意見を聞きましたところ、「思惑を持つて打算的にやるのでもない健康になりたいとか、利益を求めてやることでもない。純粹な行い。これが仏のされてきた修行だからやる。」というものともうひとつ、これは面白いなと思ったことは「染汚にはやめてしまうという意味がある。効果がないとやめてしまう。やめてしまうのは求めているから。決してやめてしまわないのが行持である」というお示しでありました。例えば坐禅会に参加されてもなかなか思うようにいかずにやめてしまう。そういう方はいらつしやると思いますが、東龍寺の坐禅会でも一度来たきりでその後は来ないという方は大勢いらつしやいます。それはこちらの指導も悪いのでしようけど、やっぱり続けていくことではないですね。

あるお檀家さんの話ですが、奥様を亡くされて、一昨年(令和二年)に、三十三回忌をコロナ禍ですが、行いました。そのお檀家さんのお宅へ毎年お正月とお盆に必ずお参りに伺つています。そうしますとお仏壇には必ずお膳がお供えしてありまして、奥様の供養をするということを中心に心がけていらつしやる方でありました。私が一番凄いなと思ったことは、必ず時間を聞くのです。私が何時に来るか聞いてくるのです。用事があつて聞いてくるのかと思つていましたが、あるときわかりました。私が来る時間に合

わけて奥様に、仏様に温かいご飯をお供えして食べてもらいたい。だから時間を聞いているのだとおっしゃっていました。こういうことを三十年以上心がけていて、決してやめないで続けていらつしやる。他から強いられたわけでもなく、自分からやらなければいけないという思いでやっているわけでもない。自然と仏さまに食べていただく、一緒に食べようということなのでしょうね。「白い飯、ゆつくり炊いて、仏と二人」布教の師である辻淳彦老師がお示し下さった詩ですが、非常にいいなと思う言葉です。このような心境のかなという思いであります。行持というのを大切にされている。せずにはいられないという思いでしょうか。そんなところを私たちは「行持」の巻から学び、お檀家の皆様にお説きいただけたらなと思いが紹介させていただきました。

### ③行持の功德

次に行持の功德というところです。

「この行持、われを保任し、佗を保任す、その宗旨は、わが行持、すなはち十方の匝地漫天みなその功德をかうぶる。佗もしらず、われもしらずといへども、しかあるなり」(『行持(上)』)

と、このようなお示しがあります。私自身は坐禅の中でやはりこういうことかなと思っています。

「もし人、一時なりといふとも、三業に仏印を標し、三昧に端坐するとき、遍法界みな仏印となり、尽虚空(ことごとく)さととりとなる。」(『辨道話』)

という言葉があります。御本山の摂心で自受用三昧をお唱えします。私は参禅者と外堂で坐っているのですが、話が脱線してしましますが、私は半畳単といいますがそういう所において、参禅者は一畳に二人づつ十人くらいで並んで坐っています。皆さん一生懸命に坐っておられ、本当に楽しかったです。その中の一人で名前が素晴らしいのですが、本堂さんという方がおられました、その方が一番古参で私のすぐ隣で坐っていました。その方自身は真つ直ぐに坐っているつもりなのですが、傾いているので私が直すのですが、やはり傾く。これが彼にとつての真つ直ぐなのだと思ってきました。彼は断臂摂心にも参加されるくらい熱心で、誰よりも早く私のスリッパをサツと出してくれるようなそんな方でした。四年間摂心と一緒に坐り素晴らしい修行をさせていただいたなという思いであります。しかし、皆で坐っているときに自受用三昧のこのお言葉を唱えると本当に共に坐っていると自他の隔たりが無くなって、自分と自分の周りの方が、全世界が坐禅の世界だという思いでした。

この数か月前にイタリアのミラノの万国博覧会があり、福井県が「坐禅と精進料理」というテーマの出版で担当は永平寺ということになり、私が坐禅の担当として行ってまいりました。ミラノの普伝寺のグアレスキー泰天老師とそのお弟子さん方と一緒に坐るのですが、私の左右の二人は面壁して私は観客の方を向いて坐りました。ステージと観客席がとても近く、目の前にヨーロッパの方々が見えてくる。三十分間の坐禅をしました。初めに永平寺の紹介のビデオが流れ、その後には泰天老師の説明があり、最後の十分間を皆さんと一緒に坐禅していただくという時間でありました。最初は見世物かなと思うような恥ずかしい思いでした。しかし、視線を四十五度落としますと、皆さんの直接の視線がわからないという点で助かりました。しかし、どんな様子かはわかりました。客席の奥は通路になっていて、その奥は日本食のレストランがありましたので、ガチャガチャと音がしましたし、吹き抜けになっていたので鳥の鳴き声が聞こえてきました。一日四回を四日間行いました。最初は嫌だなという思いでしたが、やっぱり回を重ねて繰り返し坐っていくと、自分が御縁をいただいでここに坐らせてもらっている。そして坐禅が世界とつながっている。皆さんも組めないなりに足を組んだり手を組んだりして坐ってください

つている。それが視線の先でわかりました。ちゃんと皆さんに通じているなという思いがあり、それがひとつになってくると、俺が坐っているというよりは私がいま色々な御縁をいただいて坐らせていただいているという思いが出てきました。まさに一体となって本当に世界とつながって坐っているのだという思いをこの二ヵ月後の本山の撰心で自受用三昧をお唱えしているときに、まさにこの心境、この教え、この行持だと行持の功德だと思いました。坐禅に坐禅させられているというか自分が坐るのではなく坐禅が坐禅をしているといえますか、そういう境涯というか思いを深く持つて自分の坐禅会での指導などで坐らせていただいている喜びを感じながら共に坐るといふことを心がけていきたいと思っております。

#### ④行持の継承

続いては行持の継承ということについてです。これは皆さんも良くご存知のお言葉です。

「諸佛諸祖の行持によりて、われらが行持見成し、われらが大道通達するなり。われらが行持によりて、諸佛の行持見成し、諸佛の大道通達するなり。われらが行持によりて、この道環の功德あり。」  
『行持(上)』

このお言葉の思いを寺報に書かせてもらっています。昨年(令和三年)コロナ禍でしたが永平寺へ焼香師として行かせていただきました。御授戒という本山の大切な年中行事、行持かと思えます。それを二年と休むと本山で修行している方々が一度も授戒に会わないで本山を下りてしまう。そういうことにならないように本当に試行錯誤があったと思うのですが、戒弟を呼ばないで修行僧を戒弟にし、さらに従業員も戒弟に行われました。従業員を戒弟にしたのは良い考えだったと思います。男性と女性がおりますから優婆塞、優婆夷。それから近くの尼僧さんにも来ていただいて比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を揃えて懺悔道場も教授道場も行って、授戒という行持の継続ということが行われました。その様子というのがまさに受け継がれてきたことがいまここに現れているし、私たちがここで言うということが諸祖との繋がりととなり、継承されていくことの大切さではないかと思えます。

南澤猊下の御垂示が『傘松』令和三年五月号に載りました。晋山式のとときのインタビューからです。

「現在の社会状況における宗教指導者や僧侶のあるべき姿、果たすべき役割をどのようにお考えか」という問いに対して

自肅ということにおいては、今まで通りの御開山道元禅師様がお示し頂いた規則正しい日常生活にあるのだと、そして日常生活の中にある謙虚な生き方というのが禅の御教えだろうと思います。お互いが自分自身、自分のわがままを少しでも抑え、規則正しい生活習慣を確立して、そこにはじめて本当の自由な生き方が生じてくる。その教えを修行僧たちに受け継いでもらいたいし、永平寺をお参りの方、全国の檀信徒の方々に身体で味わっていただきたい。」

現在、世界的に見ても非常に厳しい状況です。だからこそと言うより、私たち自身が普段どんなことがあっても日々の行持を怠らずに続けていくということが大切であるし、そのことを檀信徒の皆様にも苦しいでしょうが行っていく中で明かりが見えてくるのではないですかということをお伝えいただけたらと思います。

「縁起は行持なり、行持は縁起せざるがゆるむにと、功夫参学を審細にすべし。」(『行持(上)』)

お釈迦様がお悟りを開かれて、仏教という御教えが代々伝わってきた。これは縁があつて結果が起こ

つていることです。ですから縁起であります。縁起は行持なりです。では、お祖師様方たちがたゆまなく続けてきた行持というのは縁起でしょうか。どんな状況でも怠らずに続けていくということはやはり発心・修行・菩提・涅槃ということが無ければ継続していくことができないのではないかと思います。ですからそこを功夫参学を審細にすべしとお示し下さっている。私たちはいまこういう状況にあつても常に同じようにぶれることなく続けていくことが大切なのではないかと思うところであります。

### ⑤大梅法常の行持

次は大梅法常の行持です。大梅法常という方は道元禪師が行持の巻で非常にページを割いていらつしやいます。八寸の鉄塔を頭に乗せて坐禅したという方です。居眠りしたり、体が揺れると鉄塔が落ちてしまいますから姿勢が崩れずに坐禅をされたという意味かと思えます。大梅法常は馬祖道一のお弟子さんであります。「如何なるかこれ仏」という問いに対し、「即心是仏」と答えられお悟りを開かれ、大梅山に籠られるわけであります。あるとき兄弟弟子の塩官齊安という方のお弟子さんが山に迷い込んでいたら、ばつたりと大梅法常に出会い、山を下りるにはどうしたら良いか尋ねます。大梅法常は「随流去(流れに従って行きなさい)」とお答えになったと記されております。その後、そのお弟子さんは山を下り師匠である塩官齊安に報告したところ、おそらく大梅法常だということになり何とか戻ってきてもらおうと考えていたようです。そして会いに行き、最近では「即心是仏」ではなく「非心非仏」だと言っている、「非心非仏」が流行っていると大梅法常に伝えたところ、答えられたのが次のお言葉です。

「任他非心非仏、我祇管即心是佛」(さもあればあれ非心非佛、我れは祇管に即心是佛)

私は迷わないで即心是佛で行くというように答えられたということですが、これが大梅法常の行持であります。「このところを去年の現職研修の冊子の中で

「特定の教団(宗派)に所属する僧侶など(曹洞宗でいえば教師・寺族・徒弟)が新宗教などの教えを信奉し、場合によっては入信にまで至っている事実があることです。さらに、檀信徒などに向けて、傾倒した宗教の教えが高らかに説かれ、本来説かれるべき自宗の教えが蔑ろにされている状況も見られます。それは『自宗の宗旨・教義を広める』とよって人々の安寧を醸成する」という、布教教化の根本がなおざりにされている」ともいえるのです。」「現職研修 寺族研修 No.42」<sup>21)</sup>

という言葉がありました。では宗旨とは何か改めて宗憲を見ていきます。

### (宗旨)

第三条 本宗は、仏祖単伝の正法に遵い、只管打坐、即心是仏を承当することを宗旨とする

これは私たち宗侶、とくに布教教化に関わる私たちは非常に大切に、重きを置いていかなければならない、ぶれてはいけないところではないかと思うのであります。承当とは辞典によりますと①会得・領得すること。②引き受けて責任をもつて担当する。とあります。「ここでは②の意味で受け継いでいくということでしょうか。先ほどの「行持の継承」とも繋がってくると思うのです。坐禅というのは難しいです。難しいけれど宗旨の根幹として置いていかなければならないのかと思うのです。私が最初に法事の際にやっていることを紹介しました。これはとても大切なことで、「ここから法話というか檀信徒教化がスタートしていくのではないのか」という思いがあります。

檀信徒必携から宗旨の部分を紹介します。

(宗旨)

曹洞宗は、お釈迦様より、歴代の祖師によって相續されてきた「正伝の仏法」を依りどころとする宗派です。

それは坐禅の教えを依りどころにしており、坐禅の実践によって得る身と心のやすらぎが、そのまま「仏の姿」であると自覚するところにあります。そして坐禅の精神による行住坐臥の生活に安住し、お互いに安らかでおだやかな日々を送ることに、人間として生まれてきたこの世に価値を見出していくというのです。

このようにわかりやすく示してくださっていますが、実際に実行しようとすると難しいところでもあります。しかし、やはりここには触れていかなければならない、触れていつて欲しいと願うところでもあります。次の二つの文章は道元禅師が「即心是仏」ということと「只管打坐」ということを大梅法常禅師の教えからいただいていることを示しており、それがまた宗旨の根幹にそのまま来ているということを示しています。

■しかあればすなはち、即心是仏とは、発心・修行・菩提・涅槃の諸仏なり。いまだ発心・修行・菩提・涅槃せざるは、即心是仏にあらず。たとひ一刹那に発心修証するも即心是仏なり、たとひ一極微中に発心修証するも即心是仏なり、たとひ無量劫に発心修証するも即心是仏なり、たとひ一念中に発心修証するも即心是仏なり、たとひ半拳裏に発心修証するも即心是仏なり。しかあるを、長劫に修行作仏するは即心是仏にあらずといふは、即心是仏をいまだ見ざるなり、いまだしらざるなり、いまだ学せざるなり。即心是仏を開演する正師を見ざるなり。

いはゆる諸仏とは、釈迦牟尼仏なり。釈迦牟尼仏、これ即心是仏なり。過去・現在・未来の諸仏、ともにほとけとなるときは、かならず釈迦牟尼仏となるなり。これ即心是仏なり。(『即心是仏』)

●「即心是仏」、私たち一人ひとりがそういうことに気づいていく、気づけなくても檀信徒とお互いに敷衍しながら歩んでいく、という姿勢が大切かと思えます。

■仏仏祖祖正伝の正法は、ただ打坐のみなり。先師天童衆に示して云う、「汝等、大梅法常禅師の江西馬大師に参ぜし因縁を知る也(や)。他、馬祖に問う、『如何是仏なるかこれ仏』祖云く、『即心是仏』と。便ち礼辞、梅山の絶頂に入りて、松華を食し荷葉を衣て、日夜、坐禅して一生を過(こ)す。将に三十年にならんとするも、王臣に知られず、檀那の請に赴かず。乃ち仏道の勝蠟なり」と。測り知りぬ、坐

禅はこれ悟来の儀なり、悟は只管打坐のみなることを。(『永平広録』第三一九上堂)

●このことを私たちは忘れてはいけない、大切にしていっていただきたい、と思うところでもありますのでこのおししを紹介させていただきました。そんな意味からしても『行持』の巻を私たちが参究していくことは大切な、重要なことではなからうかと思っております。

## ⑥ 釈迦牟尼仏の行持

「釈迦牟尼仏の行持」というところで「大地有情同時成道の行持あり」(『行持(上)』)とあります。この釈迦牟尼仏の行持自体が非常に少ない取り上げ方になっているのですが、『発無上心』の巻に次によりにお示し下さっています。

釈迦牟尼仏言、明星出現時、我与大地有情、同時成道。(釈迦牟尼仏言く、「明星出現の時、我れと大地有情と同時に成道す。」)

しかあれば、発心・修行・菩提・涅槃は、同時の発心・修行・菩提・涅槃なるべし。仏道の身心は、草木瓦礫なり、風雨水火なり。これをめぐらして仏道ならしむる、すなはち発心なり。虚空を撮得して造塔・造仏すべし、溪水を掬舀して造仏・造塔すべし、これ発阿耨多羅三藐三菩提なり。一発菩提心を百千萬発するなり、修証もまたかくのごとし。(『発無上心』)

お釈迦様のお悟りというのが発心・修行・菩提・涅槃の同時成道ということなのだというお示しであります。私が同時成道ということだと思ひ出されることは、敬慕してやまない宮崎禪師様の監院時代の話であります。そのお話しを発心・修行・菩提・涅槃と繋げてお話しさせていただきます。

私は昭和五十六年に大本山永平寺に上がりまして、その年の秋に宮崎老師が監院に就任なさいました。そして翌年の昭和五十七年に私は監院寮に監行として配役を受けました。三時半振鈴ですが宮崎監院老師はだいたい二時五十分から三時にはお部屋をお出になります。ですから役に当たりますと老師についていかなければなりませんので、二時半頃には起きまして準備をして、お部屋の前で待つております。そうするとフウー、フウーと深い息をしながらゆつくりと老師が出てこれ、そのあとをについて僧堂へ向かいます。僧堂に着くと外堂の監院位に坐られます。振鈴前なのでまだ皆寝ている中で坐ります。三時半に振鈴が鳴り、三時五十分頃から四時半まで坐禅があります。普通であれば四十分くらいの坐禅が倍の八十分の坐禅となり、はじめの頃は足が痺れてしまつて、本来であれば老師のスリッパを出して差し上げなければならぬのですが、足が痺れて思うように動けず、ようやく自分のスリッパを出して老師を追っかけて行き「申し訳ありません」と私が謝ると、私が悪いと思つているときは怒られませんでした。春から夏にかけての時期に配役されていまして、四時半といひますと永平寺の東の上の方から太陽が上がってくるんですね。それを見ながら、きつかったけどいい修行をさせてもらったなという思ひで帰つていくという日々でありました。

宮崎老師は時々変わった行動をなさるんですよ。先を歩いていきますと体を屈められてあるものを直してゆつくりと立ち上がられます。全山の修行僧は役寮も雲水もスリッパを履いています。部屋の前の壁にスリッパをきれいに揃えてあるはずなのですが、乱れているスリッパがありますと自ら体を屈められてスリッパを真つ直ぐにされまして、そしてゆつくりと起き上がりまして、にこにこ微笑まれ「ああ、これでスリッパが成仏した」とおっしゃいます。何度もありました。私と一緒に監行をやつていた仲間もみんな経験があつて「なんだろう」「どういう意味だろう」などと仰つていましたが、誰も聞けませんでした。後から分かつたことなのですが、角田老師は私より先に監行をやつていて、彼は聞いたのだそうです。そうしたら「それはな、あんたが仏さんだからだよ」と言われたそうです。私はそれを知らなくて、ずっと抱えていました。スリッパも成仏しましたし、線香も成仏しました。相見の間に線香を立てるのですが、私が立てたのは曲がついていました。そうしたら部屋に入ってくるなり「こらこら、線香はな、真つ直ぐ立てるもんじゃ。立て直しなさい。」「はい!」といい真つ直ぐに立て直しました。そうしましたら「そうじゃ、それでええんじやぞ。これで成仏したんだ。」「またある時、私が慌てて戸をバンと閉めました。」「こら!」「はい!」「戸はな、そんなに強く閉めるもんじやない。そつと閉めなさい。」「と言われ、改めて閉め直しましたら「そうじゃ、それでええんじやぞ。これで戸が成仏した。」「これで戸も成仏しました。もつと他にも成仏したものがあつたかもしれませんが、私が印象深いのはスリッパと線香と戸でした。不思議な言葉だったなとずっと抱えていて、そして平成十六年のNHKスペシャル「永平寺一〇四歳の禪師」が放映されました。ご覧になつたことがあるかと思ひますが、その中で「自身の若い頃、六十代で本山で粟粒結核で倒れられ、片方の肺が働かないので深い息や息が荒くなる」ことがあるわけです。それからタバコを命がけで辞め

たとおつしやられておりました。そんな中で一番印象深いものが次のお言葉でした。

「私は宮崎奕保だ。私が永平寺だ。永平寺と私は一つ。自分くらい大切なものはないけれども、この大切な自分は、大勢の雲水たち、七堂伽藍を中心とする建物、木々・山・川・鳥や獣などの自然環境とともに生きている。

人も環境もみな自分だから永平寺を大切にすることが自分を大切にすることになるのだ」。

私はこれを聞いたときに、禅師様でも自分くらい大切なものは無いのだなということをまず思いまし  
たし、ちよつと安心しました。でもそれを超えてられました。自他の壁を取り払っておられた。だからス  
リップも自分のスリップではないけれど雲水と自分と一つになって、自分のスリップだと思つて直す。線香  
や戸にしましてもやはりそういうお心があつたのだなと思います。それは角田老師がお聞きになつたと  
きに「あんたが仏様だからだよ」と言われたことと繋がってくると思うのです。発心・修行・菩提・涅槃の  
行持を行っている者であるからこそ、自他の壁を乗り越えて、自我を乗り越えてそういう行いができ  
るのだらうと思うのです。

仏道をならふというのは、自己をならふなり。

自己をならふというは、自己をわするるなり。

自己をわするるといふは、方法に証せらるるなり。

方法に証せらるるといふは、自己の身心および他己の身心をして脱落せしむるなり。『現成公安』

この御教えと繋がってくるなと思うのです。仏道修行をしていくということは自分自身を見つめてい  
くことである。自分自身を見つめていくと、わがままな自分勝手な自己が見えてくる。そのわがままな  
自分勝手な自己をわする。奈良西堂老師は「乗り越える」といふ言い方しておられました。そうし  
ていくと自分が方法に証せらるるなり。自分と自分の周りの環境とともに生きている、生かされている  
ということが本当に分かつてくる。そうすると自己の身心および他己の身心をして脱落せしむるなり。  
それがまさに「大地有情同時成道」「発心・修行・菩提・涅槃」の仏道の信心に繋がってくるのだらうと、  
『行持』の巻を参究してきて最近思うところであります。

「はきものをそろえる」

はきものをそろえると心もそろふ。心がそろふと はきものもそろふ

ぬぐうときにそろえておくと はくときに心がみだれない

だれかがみだしておいたら だまつてそろえておいてあげよう

そうすればきつと 世界中の人の心も そろふでしょう

元曹洞宗北信越管区教化センター統監、元特派布教師 藤本幸邦老師

三年前(令和元年)、コロナ禍の直前でしたが北米の西海岸を中心にサンフランシスコ、ロスアンゼルス、  
サンチアゴの三地域六教場ほどを特派布教で回らせてもらいました。その時にこの詩を英訳して、皆さ  
んも一緒に唱えてもらいました。そうしましたら本当に世界と繋がっているな、想いが伝わってくれたの  
かなという思いがしました。いまはこういう状況でありますけれど、私たちひとりひとりが小さな願い  
かもしれません、少しでも利他行、発心、自未得度先度他の心、発心・修行・菩提・涅槃の心を起こし  
て、自分のできることを少しでも実行していく。それが必ずや伝わっていく。そういうことを思つて実践  
していただけたらと思うところがあります。

誰しもが知っている事を誰よりも深く拈提する。誰しもが経験している真実を誰よりも深く経験する。  
↓聞法者が実践できる法話

元妙心寺派塔頭大珠院住職 元花園大学学長 盛永宗興老師

檀信徒の皆様は法を語るということは檀信徒の皆様が実践できること、少しでも実行できることを気づいていただくことだと思えます。なかなか難しいですけども、そんな実践を心掛けていただけたらと願うところでもあります。

### ⑦雪峰義存の行持

雪峰義存(八二二〜九〇二)、この方は坐禪を大切にされて、いろいろな所へ参学なさった方です。九上洞山、三到投子という言葉があり、洞山良价禅師に九回、投子大同禅師に三回学びに行かれたそうです。何度も何度も参学の師を求めて一生懸命学ばれたという行持をなさったことを称えて道元禅師がご紹介されているわけがあります。

光陰は矢よりもすみやかなり、露命は身よりもろし。師はあれども、われ参不得なるうらみあり。参ぜんとするに、師不得なるかなしみあり。かくのごとくの事、まのあたり見聞せしなり。(『行持(上)』)

亡くなってから、もつとお聞きしておけば良かったなという時ありますよね。どうやってもそうなのだと思いますけれど、生きているときに教えあうというお互いでありたいなところでもあります。道元禅師の慈悲心にあふれたお示しではなかるうかということで紹介させていただきました。

八、「行(坐禪)説(法話)一如を心掛けて」

最後に「行(坐禪)説(法話)一如を心掛けて」というところです。道元禅師がいかに行と説とを同じように大切にされていたかということをお祖師様方を挙げて説かれています。

大慈寰中禅師(七八〇〜八六二)が、「一丈(十尺)を説くことは一尺を行うことに及ばない」と言ったのに対し、道元禅師は、行と説法を須弥山(古代インドで、世界の中心にあると考えられた大きな山)と芥子粒にたとえ、「須弥山に全量あり、芥子に全量あり。行持の大節、これかくの如し。(巨大な須弥山には須弥山としての全功德があり、微少な芥子には芥子としての全功德がある。そのように、行と説法の価値の大小ではなく、功德をそれぞれに評価するべきである。)」と言われた。

洞山良价禅師(八〇七〜八六九)が、「行不得底を説取し、説不得底を行取す。(行じきれないところを言葉で説き、説きあかしきれないところを行じる)」と示されたのを受けて、道元禅師はさらに、身体でおこなう行が口で説く説法と通じ合い、同様に口で説く説法が身体でおこなう行と通じ合うと言われ、行と説は一体だからこそ、入れ替えることができるのだと示された。

雲居山弘覺大師(八二八〜九〇二)は、「説時には行路なく、行時には説路なし。」

説く時には行が無く、行ずる時には説くことが無い、説く時は説く、行ずる時には行ずる。これは、説くことと行うことが一体であることを言っている。↓行説一如

私自身はそれほど一生懸命に坐禅をしているわけではありませんが、自分のできる限りで行っています。ただ、坐禅と法話というのは大切にしていききたいところでもあります。それが行と説の代表かと思っています。

最後になりますが、「法話こそ、行説一如の実践行」であります。言葉で語りながら、その中に行動としての気づきを入れていく。確かに言葉で語りますが、その言葉の中に「こういうことを行っているのだ」といふ教えというか実践の部分が入ってくるわけでもあります。ですから、法話こそが行説一如の実践に繋がってくるのです。自分はなかなかできなくても、言ったからには少しでも行うという気持ちを持ち、努力もできるのだと思います。そういうところを大切にさせていただけたらと思います。